

令和四年三月三日(木)

新型コロナウイルス感染状況に鑑み、メール句会を行う。

斉藤 まさお

生垣にそつと置きたる春の雪

利休忌や泥を払ひてにじり口

春愁や如何に生きるか猫として

啓蟄や五分遅れの掛け時計

春めくと風すきとほり頬をなづ

大津 そうかい

泥んこの子の持帰る田螺かな

紅梅の一樹統すべをる墓苑かな

春めくや妻女に添はれ理髪客

げんげ田や指切せし子今いづこ

残せしはレースの端布春の雪

高橋 由紀子

式日の晴れ着にふはり春の雪

河津桜花三つのまま十日かな

敷石に犬が運びし春の泥

クレソンを千切れば沢の音すなり

庭奥の梅に魅せられ門の前

新田 ゆふき

雨戸繰り恋猫入るる月夜かな

そらいろのデイズニー自転車春一番

大根の首白々と春の雪

春泥をまたげば青き欠け茶碗

水仙のさみどり揺るる小さき庭

中村 晃也

路地裏の猫の足跡春の雪

忍び合うこと教えたき猫の恋

霜柱踏む煎餅を踏む心地

蓮根掘り泥田から見る裏筑波

暮れ泥む温泉街に春の雪

樋口富貴子

抱き上げし嬰眠るまま春の雪

園児らの声はずみくる春の泥

巫女舞の鈴ちりばめし梅の彩

亡姉に似しひと見失う梅の寺

碧透けし梢見上げる落葉達

浜口須美子

一人よりふたりは淋し春の雪

春近しサッカーの泥跳ね上げて

めぐる忌に子の掌のまるく梅ふむ

掌に受けてこぼる雛菓子吾子育つ

つくし摘む少女が起点大夕焼

宮原 凧

朝市の籠に溢れる春野菜

啓蟄や木の根に膨れアスファルト

春泥を尻まで跳ねて子らの声

心中の舞台のような春の雪

すぐ消ゆる手のひらに受く春の雪

志村 良知

霜と泥猫も進退窮まれり

豆柴も泥足拭かれ霜柱

杉林暫し鎮めて春の雪

雨夜明く端山輝き春の雪

十倍のルーペの先に芽組みかな

出澤くれ竹

泥縄の発句を捻るや春の夜

田畑を斑らに描く春の雪

春の日差し雪山の裾捲り上げ

畦焼きや大地を画す腕は見事

土筆摘む娘が一人振り返り

首藤 しずを

春の雪「ほつばや」健さんしのびける

春泥を跳ぬる長ぐつ春の子よ

薔薇の芽や明るき雨のほつほつと

青空や脚立の下は草青み

老松の根方に優し春の雪

森田 元斐

屋久島のたんかんの艶春半ば

暮れかめる学舎の子へ四時の鐘

万物のうごめく気配春の泥

川中に縄張りのある春の鴨

朝に降り夕べに消へる春の雪

安藤 晃二

シャーベットに花閉じ込むや春の雪

梅林や泥水を除け車止む

紅白のテントはためき梅遅し

溪音にぎんねず揺らす猫柳

取り取りの帽子の列に牡丹雪

内藤 まりこ

行儀よく枝にほつほつ梅の花

春の雪泥も混じりし雪丸め

雨も良し今日が主役の雛人形

玉川の土手水仙の群れ咲けり

春ともし浮かぶ梅林今盛り

長尾 進一郎

春の雪力メヲを待たず消えにけり

長風呂に霞める灯り春の宵

春の野を駆け回る子や顔の泥

夕暮れの暖色の空春兆す

春めくや川鶉の立てし波光る

西川 知世

靴の泥少し乾びて一の午

人を恋ふごとく吹かるる春の雪

空爆がスマホ画面に街余寒

風光る日比谷に万のガラス窓

反戦のデモと余寒の八子公と

次回は令和四年四月七日(木)、

兼題は齊藤まさおさん出題の「残雪」、席題は

西川知世さん出題の「花」(漢字の)一切です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

残雪には、去年(こそ)の雪、残る雪、雪残る、

陰雪、雪形と傍題がある。降る雪ではなく春にな

つても北側や山の岩陰、木蔭などに消え残ってい

る雪で、遠い連峰の残雪も美しい。残雪を詠うこ

とは万葉集にも残っていて、古くから歌人が好ん

だ雪で名歌が残っているそう。残った雪に焦点を

当てて読むのが「残雪」であるが、解け始める雪

を読むのには「雪解」という別の季語がある。

「残雪」はどちらかというと遠景の雪であり、

晩春になっても残っている。「残る雪」は春半ば

になっても庭などに残っている雪として多くの句

藪かけや足軽町の残る雪	雪凡
田一枚一枚づつに残る雪	高浜虚子
残雪や小笹にまじる竜の鬣	芥川龍之介
藪の中のひと町つづき残る雪	室生犀星
いづくにも雪消え水の辺に残る	山口誓子
滝みだれ大残雪にひびき落つ	水原秋櫻子
残雪やつぶての如く鳥の影	相馬遷子
愛別といふ邑過ぎぬ残る雪	富安風生
残雪は獅子の形の深山かな	星野紗一
残雪や故郷を離るる薬売	青柳志解樹
残雪にとどきしばらく夕日澄む	岡田日郎
驚ゆける樹海は粗く雪残り	岡田貞峰
残雪に当ててトラック止まりけり	津川絵理子
早池峯や田の三枚に雪残る	角川春樹